

# パンスヴァン

## — その研究史的位 置 —

山 中 一 郎

### 1.

過去の人類の周辺環境への生態的かわり方を明らかにしようとする傾向が、最近の先史考古学研究に強くうかがえる。そこでは広い範囲を平面的に発掘する調査が採用され、個々の遺物の出土位置を正確に記録することが試みられている。こうした研究の中で著しい成果を挙げた例をフランスのパンスヴァン遺跡における分析に認めることができる。しかしこの傾向の研究は始められてまだ日は浅く、人類の長い過去を通しての比較を試みるには至っていない。同時的もしくは非常に短期間の居住があった遺跡での分析に研究例が限られているのが現状である (Leroi-Gourhan, Audouze et Karlin 1978, p. 143)。

パンスヴァン遺跡の発掘者であるルロア-グーランの研究の特色は、まず発掘調査における全ての遺物の原位置の綿密な記録にある。それには *décapage* という“微層位平面発掘法”がシステマティックに適用され、発掘部分を雨水から守る覆い屋と発掘作業者の足から守る足場が必須のものである。過去の人類の生きざまを分析・推論的に議論するためのデータの収集の質が、議論の質を保証するものであることは疑問の余地がない。データ収集の方法とデータ分析の方法の関係は、後者の要求が前者の厳密さを求めることを一般的とするが、両者は不可分、不離のものである。しかし当面の分析対象にはなしえない遺物をも、データとなしうるものは記録するという立場が、パンスヴァン遺跡では徹底してなされており、むしろこの点での努力は相当なものであるという印象をうける。

こうした発掘法の方法論的止揚は、そこに検出され、観察されるデータに対する用語の厳密性を要求し、解釈用語と分析用語の分離をすすめることになる。これは先史考古学が長い間その努力を払うことが少なかったといえる、独自の科学としての用語体系の確立にむかっていることを意味しよう。さらに重要なことは、この新しい意味をもつ研究は地形学、古動物学、古植物学といった別の体系との協力によって進められていることを記憶することであろう。そしてルロア-グーランの試みた“空間分析”は、その復原像の記述描写の具体性についての心配りが著しく認められ、それは技術学的側面を強くもつフランス民族誌学との関係が深いことを示唆するという (Leroi-Gourhan, Audouze et Karlin 1978, p. 149)。

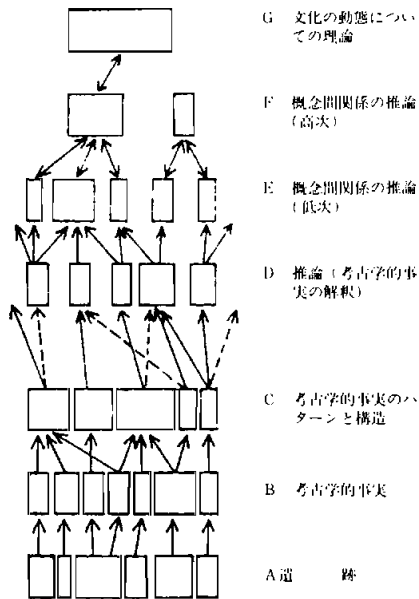
ところで第2次大戦後に始まり、25年間にわたるフィールド調査が積み重ねられたルロア-グーランの研究は、パンスヴァン遺跡の研究として一部分はまとめられている (Leroi-Gourhan et Brézillon 1966, 1972)。それ以来すでに10年以上が経過し、我が国において

もその成果は周知され、調査・研究にその方法が反映されてもいる（例えば安孫子、堀井（編）1980）。しかし最近になって、ルロア-グーランの研究に深くかかわる論文が発表された。それらは過去の人類の生活復原の検証性の問題と空間分析の問題に関係する。従って今日においては、そうした脈絡のなかでパンスヴァン遺跡の研究をみる必要がある。

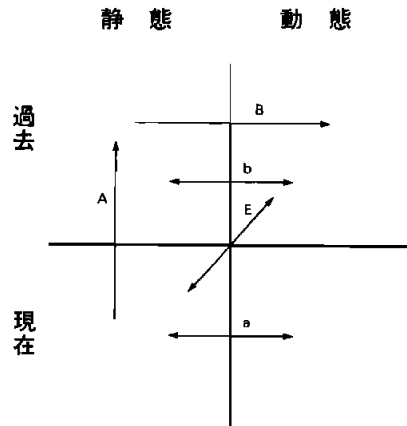
2.

過去の人類の生活復原の検証性の問題とは、いわば戦略的な論理の問題である。過去の動態的事実を現在において復原することは、動態と静態に各々あらわれる事実関係が確実にわかっていないこと、および時間的ギャップのために普通には不可能である。

時間的ギャップのために不可能であるとするのは、ヨーロッパの先史考古学の研究史の示すところでもある。そこで先史考古学では、一定の時間性を限って、あるいは同時間と決定できる資料をとって帰納的解釈を推論することになる（第1図）。しかしこう言っても、時間性の同定は非常に困難なことで、それは編年学の長い研究史を検討すれば理解できる。そこで帰納的解釈法の研究は、その推論の蓋然性を高めるために精密な編年学を確立する必要があるのみならず、大きな時間的隔たりと物質の保存性に支配された限られた遺物をデータとする障害があるために、データ収集の意識と技術の高揚を求めたのである。民族誌学者ルロア-グーランは、その民族誌学的データ収集の方法を、限られた遺物しか残っていない



第1図 帰納的解釈法による理論の構築の過程（阿子島1983, 190頁）



第2図 先史考古学研究概念図  
A：編年学 B：帰納的解釈(型式学など)  
a：ミドルレンジセオリー b：演繹的検証  
E：民族誌例との対照

い遺跡に適用したのであるが、先史考古学の側からみれば、これは学史的必然といえ、帰納的解釈法の到達点と評価しうるものである。すなわち現在で認識する静態的事実から、編年学を採用して過去の静態的事実を認めうるとし、そのデータを帰納的解釈して過去の動態的事実を推論するという戦略である（第2図）。現在の先史考古学者は現在という時間性的事実を認識することができる。それは静態的事実で認識するが、動態的事実をも理解できる。しかし過去の事実は現在に残りえた静態的事実としてしか認識できず、また過去の静態的事実から動態的事実を復原する行為は帰納的解釈であり、極限的には推論としかいいようがない。現在から過去へ、そして静態から動態への区画をこえるための手続きとして必要な方法的体系が、先史考古学の場合はそれぞれ編年学であり、型式学であるといえる。

ところで過去の人類が関係した動態的事実に至る戦略として全く異ったものが提示された。1960年代半ば以後、「ニューアーケオロジスト」の仮面をつけた研究者によって萌芽的になされたのであるが、最近では部分的事例研究もあり、論理も明確なものになってきた。我が国においては阿子島香が、もとをなしたアメリカの研究の流れを解説し、そこで主要な役割を果たしているビンフォードの研究を示し、その言葉を巧みに引用しつつ、新しい戦略の論理を主張している（阿子島1983）。ここでは阿子島の論文を通して「ミドルレンジセオリー」を媒介とする方法を理解し、その方法的戦略とルロア-グーランの進めてきた研究をあわせ考えることにしたい。

新しい戦略とは、過去の動態的事実に至るために現在の静態的事実とそれに関係する動態的事実とのセオリーをまず確立することに始まるものである。それはミドルレンジセオリーと呼ばれ、「単に資料のパターンと行動の間を蓋然的言葉によって対応つけるだけが目標でなく、解釈のためのより大きなモデルを確立することをめざす」ものである（阿子島1983, p. 191）。ミドルレンジセオリーはいわゆる民族考古学による成果が代表例で、広義的には資料の意味づけという性格を有する実験的研究や自然科学的分野の研究も含まれるという。一方復原されるべき文化変化プロセスをめぐるさまざまな「法則」は一般理論と呼ばれるが、これは過去の動態的事実であるため、何らかの手続き的論理なくしては提示できないものである。そこで新しい戦略では、この一般理論を仮説的に提示し、過去の静態的事実として認識されている（このこと自体が難しい作業であることは先に触れたとおりであるが）考古資料で、ミドルレンジセオリーを媒介として検証されるべきであるとする。確立されたミドルレンジセオリーは現在の事実関係であるから、過去においても、さらには異った民族においてもその関係が適用できるかどうかは、「斉一説の仮定」への信頼の問題になるが、事例研究が示されていないのでここでは具体的には議論できない。

この戦略的論理で議論になる諸点について阿子島が触れている記述は核心をついている。例えば「斉一説の仮定」の適用についていえば、阿子島は梶原洋（1981）の仕事あげつ

つ、『モデルがなければ解釈できないという原則』が存在することを述べるのである。モデルを作ることは現在の行為であるが、過去の事実を考えることはすでに現在のモデルを過去に適用することで、「斉一説の仮定」を認めていることになる。ともかく『現在の過去への延長』について前提となる「斉一説の仮定」に対する態度が議論となることは阿子島のいうとおりであり、ビンフォードのように適用範囲を広くとるか否かを問わず、復原される過去像がデータの本質およびその操作法に照して多くの研究者の納得範囲に含まれるか否かが問題なのである。

阿子島が指摘することで他の重要な点はミドルレンジセオリーの普遍性の問題である。民族考古学の観察例が普遍性をもちえないので、ミドルレンジセオリーが成立しない条件あるいは状況があることは確実である。民族考古学というのは、従来は民族誌学が果してきた行為を、とくに考古学的事実を動態的事実として解釈（理論化）する目的について媒体を得ることを意図して考古学者が試みるものであり、ビンフォードによれば「考古学的記録の形成過程」をよりよく理解することに通ずるといふ。そこには民族誌学が蓄積してきた成果は利用し難いという意識があるようだ。しかしこの民族考古学は「斉一説の仮定」の問題を別にしても、他にいくつかの問題があることになる。ひとつは先に述べた普遍性の問題である。民族考古学の個別研究は数限りないモデルを作っていくであろうが、どのようなモデルに抽象化されればミドルレンジセオリーが成立したことになるのであろうか。他は先史考古学者が民族誌学という異った体系の科学を行うことの問題である。従来の民族誌学の蓄積の先史考古学的利用が否定できたとしても、ルロア-グーランのような民族誌学者が研究者自身の中に蓄積したものをもちて先史考古学を行うことは否定できない。帰納的解釈で引き出された過去像は検証不可能であるといっても、帰納的解釈による理論構築は第1図に示す各々の過程ごとに解釈がなされる必然性と納得性を確かめていくところに特色がある。この必然性と納得性の点でルロア-グーランの仕事は先史考古学にとって重要なのである。そして阿子島がその労作の結論で示した民族誌学と先史考古学の見直し関係は（阿子島 1983, p. 193）ルロア-グーランのこの2つの科学に関する研究展望（Leroi-Gourhan, Audouze et Karlin 1978, p. 149）と奇しくも一致する。論理の展開法が異なるとはいえ、密接な関係として民族誌学と先史考古学が捉えられることは暗示的である。

新しく提示された演繹的仮説検証法は今のところ全体の戦略としても評価し難い段階であろう。ミドルレンジセオリーの確立作業の主たる部分が、従来の民族誌学の分野に先史考古学者が入りこむことであるといえる時、さらには先史考古学者がその段階にとどまっている時点では、その研究は人類の過去を研究する考古学とは別のものといわざるをえない。それは民族誌学の研究である。しかしミドルレンジセオリーを確立する目的が、過去の動態的事実に至るための媒体理論を作るといふ戦略の下にあるので、しかも過去の動態的事実を復原

する具体的作業が未だなされていないために現在ではその方法を評価できないので、民族考古学は先史考古学のひとつの方向性として存在しているのである。

研究の経済性という点からみればこの戦略は大きな問題を含んでいる。仮説検証法で検証されるべき一般理論はどのようにして提示されるのであろうか。検証されるべき対象であるからどのようにでも自由に考えつければよいという。しかし数限りなく提示される仮説を数限りなく棄却した後、やっと成立する一般理論に至ると考えるのだろうか。これは研究の経済性にとって由々しい問題である。そこで、それに照して検証される考古資料が存在するのであるから、一般理論としての仮説そのものが何らかの帰納法的推論の産物でないという保証はなくなる。一般理論の仮説がすでに知られている考古資料からの帰納法的推論をうけることは可能であるが、そういう場合には厳密な帰納法的推論をうけたかどうかやはり問題になってこよう。というのは、仮説の設定自体が現在の先史考古学者の経験のたまものでしかないのは明白なことであるからである。帰納的解釈法によれば、解釈できない事実は事実としてそのままデータ提示されて、他のデータとの対比あるいは解釈に至りうるまでデータの蓄積を待つことになるが、演繹的検証法では、研究者の経験をはずれた仮説ははじめから検証の対象としても浮かびあがってこないことになる。

帰納的解釈法による伝統的な先史考古学はルロア-グーランの研究によって、そのデータ収集の厳密性がかくも止揚されたと評価できる。果して演繹的仮説検証法を主張する新しい考古学は、過去を議論するに際して欠くことのできない考古資料の収集法に関して何を求めるのであろうか。これは先史考古学にとってきわめて大切な問題なのである。

### 3.

空間分析法はとくに1970年代に著しい進展をみるが、ミドルレンジセオリーの確立をめざす研究が戦略的問題を先史考古学に投げかけたとすれば、これは戦術的な問題である。演繹的仮説検証法をかかげてミドルレンジセオリーの成立が企図されるのに対して、空間分析法はあくまでも帰納的解釈法のワクの中にある。

1980年代になってパンスヴェン遺跡のデータがK-means法によって分析され、その結果が示された(Kintigh and Ammerman 1982, Simek and Larick 1983)。分析の対象にパンスヴェン遺跡が取り上げられた理由として、1) 三点計測法によって全ての遺物の出土位置が記録されていること、2) その遺跡についてモノグラフとして研究が示されていること、3) 遺物分布の視覚分析がされており、遺跡の形成過程を解釈していること、の3点があげられている(Simek and Larick 1983, p. 167)。ところでこの2つの論文は同一作業に基づいており、キンタイとアンマーマンは方法の提示に主たる面をおいて、パンスヴェン遺跡例の分析では3型式の石器と、下顎、前肢、後肢の三部分のトナカイの骨の平

面的出土位置のみがデータとして取り扱われているにすぎない。他方シメックとラリックの論文では5型式の石器遺物と5部分の骨の平面的出土位置が分析対象とされている。そこでシメックとラリックの分析について考えていこう。

まず遺物分布は群を構成するが、その群数を仮定する作業がなされ、パンスヴェン遺跡では3, 6, 9個の群が何らかの意味をもつことが10種のカテゴリーに属する遺物ごとにまとめられる。5部分の骨の同定の客観性に問題はなく、また5型式の石器遺物も石核、彫器、背付細石刃、搔器、錐であるから客観性は高い。コンピューターを利用した出土位置の平面的距離に基づく群構成識別であるから、操作の段階でも客観性は保証されているといえよう。3個の群が仮定された場合の遺物分布の群構成は、発掘調査で検出された炉の中でルロア-グーランが主要炉と定義した3つの炉に関連している。この点では炉の存在を無視して分析した結果が、ルロア-グーランの解釈が意味をもつことを裏づけることになるという。つづいて群が6個、さらに9個と仮定された分析例が示されるが、単純に先の3つの群構成の各々が2分あるいは3分されるという具合にはなっていない(Simek and Larick 1983, pp. 171-172)。この現象に対する解釈は与えられないままであるが、さらにそうした分析過程で3つの主要炉からはずれていく群構成について他のタイプの炉との関連なども言及されないままに終わっている。むしろ分析者は何らかの主要炉に関係しない特殊な活動を群形成の要因として今後求めていく指針と判断しているようである。

阿子島は『一般に統計は現象を要約し、一見してわからない相関を見出すが、解釈は出さない』と見事な言葉を述べたが(阿子島 1983, p. 178)、シメックとラリックの研究も統計的作業と同じ性格を有している。対象とされるデータの性格が解釈に比して一見わからない場合はとくにそうなのであるが、ともかくこの“ブラックボックス”的作業は一般の先史考古学者にとってなじめないものようである。

さて空間分析の基本は遺物分布を視覚的に群構成にまとめることであるといわれるが(Kintigh and Ammerman 1982, p. 31)、その操作法は客観性を求め続けてきたと思える。しかしいわゆる客観的な方法は、その客観性が徹底されればされるほど、解釈的結論を与える作業に問題を生じさせてくる。シメックとラリックの研究では、(x, y)で示される平面的位置関係のみが10種のカテゴリーについて操作されたのであるが、パンスヴェン遺跡の発掘調査で得られた個々のデータの自明的解釈を含めて操作がなされれば、より興味深い結果が期待できよう。データの解釈はそれ自体問題がつきまとうが、解釈的意味づけのないデータ操作は逆にデータの集積にひとつの合理性を与える域をこえないことになろう。すなわち帰納的解釈を与えることを目的とする場合には、個々のカテゴリーの解釈的意味づけを吟味しないままにデータ全体を操作することは、集積されたデータ全体の解釈のみに作業が対象されることになる。先に述べたとおり、帰納的解釈法は理論的客観的検証が確かに不

可能であるが、解釈がなされうる必然性が一過程ごとに確かめられていくところに特色がある。解釈は選択肢をもって推論されていくが、シメックとラリックの研究例のように、想定される選択肢のどれをも言い切れないという場合がしばしば存在する。だからこそ、比較可能な質をもった他のデータを多く要求する現実が生じ、パンスヴァン遺跡の研究のような先駆的具體例では、問題の解決に至るよりも新しい問題を多く生ぜしめることになっているのである。しかしこれをもルロア-グーランの先史考古学になした大きな貢献と考えてはいけないだろうか。

シメックとラリックの分析は、分析の複雑性を増すことがもたらしうる結果に期待がもてるので、彼らが結論したように今後の進展を待つべきであろう。しかし他の分析法をかかげる研究者にもパンスヴァン遺跡の調査データは使用されうるというルロア-グーランの予見（Leroi-Gourhan et Brézillon 1972, p. 258）は事実となったのである。

#### 4.

パンスヴァン遺跡の研究は、厳密な発掘調査法と遺物分布の徹底した記録法に基づいている。その空間分析はそうして作成された遺物分布図の視覚分析によっているが、例えば群構造の輪郭線を描く作業はマニュアルであっても決してインテュイティヴではない。カテゴリ-ごとに一定の間隔内に存在する遺物がある場合に群としてまとめる原則が定義されているからである（Leroi-Gourhan et Brézillon 1972, p. 238, note 73）。

ルロア-グーランの分析では、まず発掘調査によって検出された構造のなかで、炉などのようにその構造が直接的に認知できるものを顕在構造と定義し、他方遺物分布の分析によってはじめて認知できる構造を潜在構造と定義する。またひとつの石器型式、焼石、赤色オーク、同じ動物種の骨の一定部分といったひとつのカテゴリ-に属する遺物の分布が示す構造を均質構造、複数のカテゴリ-に属する遺物からなる構造を不均質構造と呼ぶ。均質構造の分析は、鈳物質の搬入遺物、石器遺物そして動物相遺物に分けて、各々の中で分類されたカテゴリ-ごとに試みられる。不均質構造の分析は、顕在構造として認知される炉をはじめとして、均質構造を複合させた“手入れ空間単位”の設定に至っている。すなわち認知と意味づけが比較的容易な顕在構造である炉がとりあげられ、その構造の技術的分類により、石囲い凹み炉のほか、小型凹み炉、平形炉、礫炉に分けられる。また類似した火の使用に関係した遺構は、潜在構造を明らかにすることにより灰捨て場と定義されている。そうして主として接合作業による分析と遺物分布の分析から、分類された炉とさまざまな潜在構造のかかわり方が明らかにされているのである。

500 m<sup>2</sup>程に達するパンスヴァン遺跡36地区には、石囲い凹み炉が3基存在するが、各々に関連する潜在構造から判断して、他の炉とは区別されて主要炉と考えられる。それらの主要

炉のみに対して、円形もしくは楕円形の住居構造が想定されている。3つの住居構造は均質構造を潜在構造的に分析した結果では類似したものであるという。しかし焼石の接合作業を加えた潜在構造分析はT112炉→V105炉→L115炉という時間的順序を確立する。また剝離作業の結果による石器遺物の分布(第3図)は、T112炉をもつ住居構造の覆いが存在した時に、V105炉をもつ住居構造があって、それらの住居構造に生活した人々が炉の位置する入口部から外へ不要物を捨てたことを認めさせる。従ってT112炉とV105炉はある期間は同時存在したことになり、3つの主要炉の時間的關係は、T112炉がまず存在し、やや後に(やってきた別の集団によって)V105炉が作られ、それら2つが放棄されてやや長い時間の経過した後にL115炉が構築されたことがわかるのである。

また石囲いに用いられた石は、最大のもので径60cm位の平板石であるが、T112炉、V105炉で使われたものがL115炉を構築する時に採集・利用されている。そうして径20cm位になるまで使われているが、石の大きさが炉の使用期間を示すとすれば、L115炉は他の2つに比して使用された期間が短いことになる。また炉周辺に残された石器遺物や動物相遺物の量が使用期間を反映すると考えると、V105炉>T112炉>L115炉ということになる。しかしこの点については石囲いに使われた石の機能が決定しきれないので、他のデータからの結論づけが必要であるという。すなわち石が小さくなってしまふとなくなる機能がその種の炉には存在したかどうか、あるいは使い始めた時の大きさから石がだんだん小さくなっていても、炉の機能は変わらなかったのかわからないのである。他に焼石および石器遺物の接合を伴う均質構造分析は、T112炉とV105炉の共通の灰捨て場を明らかにした。さらにトナカイの犬歯の分布(均質構造分析)は、T112炉にからんで7本、V105炉にからんで6本、共通の灰捨て場に1本を数え、頭部が焼かれた後に解体されたことを示唆している。上顎、下顎、歯列も同じことを示している。

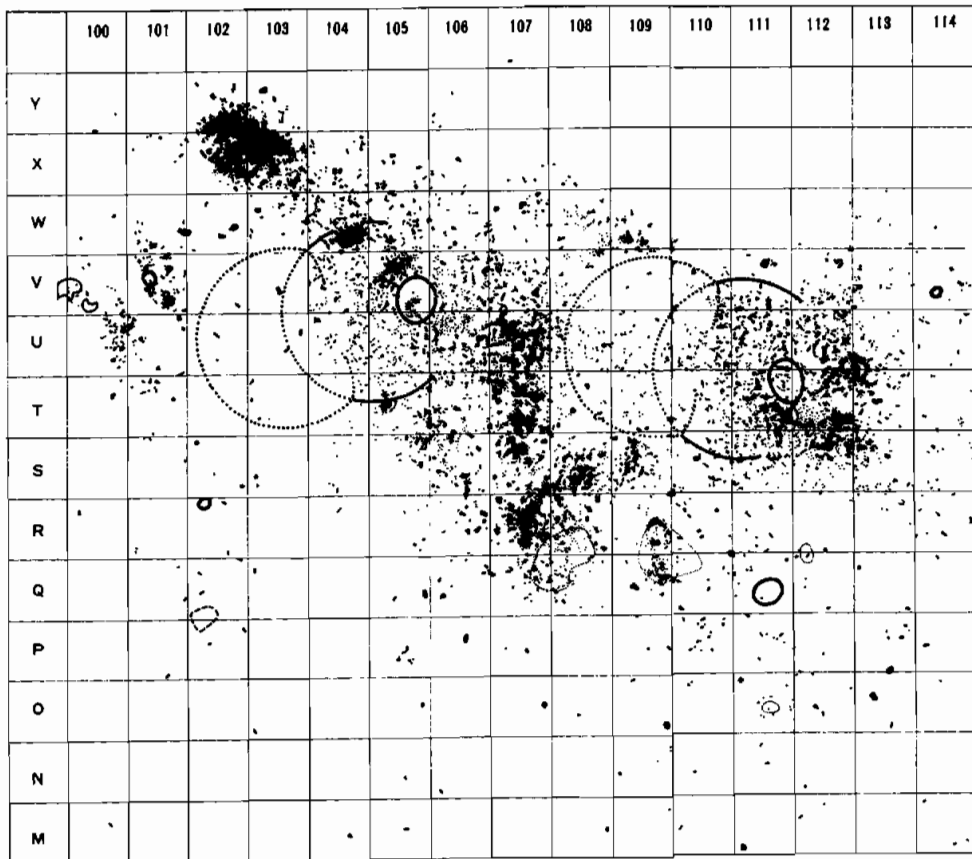
パンスヴェン遺跡の研究はこうした解釈を推論するばかりではない。T112炉とV105炉が一定期間共存したことは、2つの住居構造が類似していることから、少なくとも2つの類似した構成集団が隣りあって居住したことを示している。彫器と彫刀面打撃片の接合作業を主とする潜在構造は、36地区では3基の石囲い凹み炉の各々に上部構造が覆うことを示したが、先には第1居住地の直線上にのぼる3基の石囲い凹み炉について、各々を覆う上部構造が結合することを想起させたのである(Leroi-Gourhan et Brézillon 1966)。そのデータは3つの類似した住居構造が同時存在したことを示すもので、36地区の2つの共存例とともに社会学的議論の単位となるデータを具体例として提供している。

結合した上部構造は、技術的には類似した単位の3つの構造に分けられるものである。36地区における赤色オークの均質構造分析は、住居構造の覆い部分は入口部以外のところでも開閉があったことを示している。獣皮のような覆いの裾をまくりあげることが考えられるが、



そのような状態で3つの住居構造が結合していたと考えればよい。すなわち覆い部分の基礎的構造は、今までの発掘調査で知られたパンスヴェン遺跡の例では全て変わらない。その居住面は径約3 mの円形に近いものとなっている。この事実は、住居構造の設営、解体そして移動という点を考慮すれば不自然なことではなく、原史時代例、そして民族誌例にまで意外と同じようなことが見られるという(Leroi - Gourhan et Brézillon 1972, p. 246)。

ところで最近ビンフォードは、第1居住地の3基の炉を覆う上部構造が結合していたとするルロア-グーランに対して、異った考えを示した(Binfond 1983, pp. 158-159)。それらの炉には覆いがなく、野外にあって風向きの変化に伴って1人の人間が2つの炉にかかわっていたと解釈した。ルロア-グーランは空間分析を行う前に炉を覆う上部構造が存在したと考えていると弱点を指摘し、さらにビンフォード自身の民族考古学的経験からそう主張するのである。民族考古学的経験がミドルレンジセオリーと呼べるまで理論化されているかどうか彼の戦略にとって重要であることは、すでに述べたことでも明白である。しかし民族考古学が民族誌学のワクの中にとどまっているとすれば、ルロア-グーランは一流の民族誌



第3図 パンスヴェン遺跡の石器遺物分布図(Leroi-Gourhan et Brézillon1972, pp. 102-103)

学者であることを想起しなければなるまい。

第1居住地から36地区へと、パンスヴァン遺跡の研究は進展的に発表されている。36地区のT 112 炉とV 105 炉をめぐる石器遺物の分布は（第3図）、2つの炉の同時存在を示しており、社会学的議論の単位としてのデータを与えるばかりでなく、ビンフォードの言葉である「上部構造を想定した後に空間分析を行っている」という批判を許さない証拠ではなかろうか。さらにルロア-グーランは、「文化遺物」として石器、骨角器、美術品、赤色オークを、とくにヒトの意志を帯びたものとして区別するが、それらの均質構造も住居構造が主要炉にからんで存在したことを想定させる証拠となっている。例えば灰捨て場はそれらの分布する「文化ゾーン」以外の地に設けられているのである。

議論がさらに深められることが望まれるが、ともかくここに取り上げた最近の論文は、先史考古学研究の上でパンスヴァン遺跡の研究が占める位置の重要なことを示したといえよう。住居構造にかかわった過去の人類の行動についての理論化と、さまざまな空間分析法の適用は、ルロア-グーラン自身が認めるように、従来のフランス先史考古学に不足していたものと思われる。恐らく発掘計画と理論研究計画の目的一体化が先史考古学の今日的課題ということになる（Leroi -Gourhan, Audouze et Karlin 1978, p. 149）。しかしそれはフランスのみにいえることではない。

〔付記〕 今春、奈良大学文学部を定年退官される新井清先生に本稿を献げうることを限りなく名誉に思う。先生には10年足らずの間、さまざまな意味での励ましをいただいて今日に至っている。とくに学問研究にある者が気にとめねばならない社会的正義に関するお教を深く心に刻ませていただいたことである。それは国際的研究への理解と同じ根をもつものであるが、外国語で書かれた研究への興味と注意が要求された本稿は、先生の日頃のお言葉を肝に銘じていればこそなしたものである。

東北大学・阿子島香氏にはビンフォードの研究について多くの貴重な御教示を受けた。また東北大学・会田容弘氏、奈良大学・酒井龍一氏からは空間分析に関するお教をうけることが多かった。心からのお礼を申し上げる。

#### <引用文献>

阿子島香（1983）「ミドルレンジセオリー」、芹沢長介先生環暦記念論文集刊行会（編）『考古学論叢Ⅰ』所収、東京、171-197頁。

安孫子昭二、堀井昌子（編）（1980）『多摩蘭坂遺跡』、国分寺（東京）。

梶原洋（1981）「第2、第3、第4遺物集中地点石器群の使用痕分析」、石器文化談話会誌第2集『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』所収、仙台、96-107頁。

- BINFORD, Lewis R. (1983) ; " *In Pursuit of the Past. Decoding the Archaeological Record* ", London, Thames and Hudson.
- KINTIGH, Keith W. and Albert J. AMMERMAN (1982) ; ' Heuristic Approaches to Spatial Analysis in Archaeology ', " *American Antiquity* ", Vol.47, No. 1, pp. 31-63.
- LEROI - GOURHAN, André et Michel BREZILLON (1966) ; ' L'habitation magdalénienne no 1 de Pincevent près Montereau (Seine - et - Marne ) ', " *Gallia Préhistoire* ", T. IX, fasc. 2, pp. 263-385.
- LEROI - GOURHAN, André et Michel BREZILLON (1972) ; " *Fouille de Pincevent. Essai d'analyse ethnographique d'un habitat magdalénien* " (VIIe supplément à *Gallia Préhistoire* ), Paris, CNRS.
- LEROI - GOURHAN, André, Françoise AUDOUZE et Claudine KARLIN (1978) ; ' Processus de structuration de l'espace. La structuration de l'espace en Préhistoire ', " *La Recherche en Sciences Humaines 1976/1977* ", Paris, CNRS, pp. 143-152.
- SIMEK, Jan F. and Roy R. LARICK (1983) ; ' The Recognition of Multiple Patterns : a Case Study from the French Upper Paleolithic ', " *Journal of Archaeological Science* ", No. 10, pp. 165-180.